
帰ってきたカブト

D a i s y K a t s u r a

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

帰ってきたカブト

【コード】

N0991C

【作者名】

Daisy Katsura

【あらすじ】

ネイティブを含むワーム達が倒されて十数年、その残党が再び地球侵攻をし始めた。

(前書き)

思いつきの一発ネタです。

帰ってきたカブト

都内のある所に建つ都立水利高等学校。此処の1年-C組の教室で、

「はぁ・・・疲れた」

と、少女が机に伏していた。

少女の名は天道てんどう 未来。天の道を往き、未来を掴み取る少女である。

その未来の下に、二枚目の顔を持つ男・加賀美かがみ 雄介がやって来た。

「ん、誰かと思えば10段階評価で成績がオール1のかがみんじゃないか。何か用？」

「偶には一緒に帰ろうかなって思ってな。それと、”10段階評価で成績がオール1”は余計だ」

「ごめん、かがみん。今日はそんな気分じゃないの」

未来はそう言うと、席を立てて教室を出て行った。

「ま、良いか」

加賀美はそう口にする、鞆を持って昇降口へ向かった。

「しっかし、何なんだあいつ？この前から何か冷てえし」

「誰が冷たいって？」

そう問うのは未来だった。

「いや、だから、天道の奴が」

「悪かったわね！」

「わっ、何でいんだよ!？」

「気が変わったのよ。一緒に帰ってあげる」

えっ 戸惑う加賀美。

「何よ、私じゃ不満？」

「いや、別にそんな事無いよ」

「じゃあ早く帰ろう？」

「お、おう……」

一方、1-C^{きょしつ}では、未来が靴を探していた。

「何で靴が無いのよ？」

と、誰に言うのでも無く口になると、

「あら、帰ったんじゃないの？」

と、クラスメートが声を掛けて来た。

えっ？ 未来は目を点にした。

「いや、さつきね、職員室から戻る時、加賀美くんと一緒に帰るのが見えたから。」

で、どしたの？忘れ物？」

「ねえ、それ本当に私だった!？」

未来はクラスメートの肩を掴むとそう言った。

クラスメートは疑問に思いながらも、本当だよ、と言った。

ワーム 未来の頭にその一言が過ぎった。

「かがみんが危ない!」

未来はそう口になると、慌てて校外へ飛び出した。

加賀美は、未来に連れられ、とある河原へとやって来た。

「天道、こんな所に何があるんだ？」

加賀美がそう訊ねると、サングラスを掛けた黒尽くめの男達が数十人程やって来た。

「ねえ、かがみん。あなたも私達の仲間になつてくれない？」

未来がそう言うと、黒尽くめの男達は、緑色の蛹ワームへと一斉に姿を変えた。

なっ！ 加賀美は驚き、足が竦^{すく}んだ。

「て、天道……お前……一体？」

その言葉に、未来は微笑んだ。

「怖がらなくて良いよ、かがみん」

未来はそう言っつて、加賀美に歩み寄った。

「この怪物共を前に怖がらずにいるってのはちよつと無理だな・・・」

加賀美はそう言い、後退りを試みるが、一步も動けない。

(どうしよう、足が竦んで動けない)

その時、遙か上空から赤いカブトゼクターが飛来し、未来を襲った。

「ぐつ、何だこいつは!？」

そしてそのゼクターは、土手の上に立つ一人の少女の方へ飛び去つて行つた。

!?!? ゼクターを目で追い、土手の上を見上げた未来は驚いた。

「バカなつ、貴様は私の部下が殺した筈!？」

「天道が二人? 一体どうなつて?」

と、加賀美。

「あなたの部下つて言うのは、こいつの事かしら?」

すると、もう一人の未来の後ろから、一体のワームが姿を見せた。

「失せる」

そう言つて、もう一人の未来は、ワームの背中を蹴り、土手から突き落とした。

ドサツ! と、鈍い音と共に、ワームは河原へと落ちた。

「大丈夫か!？」

未来は慌てて駆け寄ると、心配そうな顔でそのワームに聞いた。

「お気を付け・・・下さい・・・」

ワームはそう言い残して爆裂霧散。その爆風で、未来のスカートが捲れ、下のパンツが見えた。

(と、トランクス!?)

加賀美は目を疑つた。

「貴様・・・よくも私の部下を・・・」

殺れ! と、未来が叫ぶと、数十体の蛹ワームが、土手の上にい

るもう一人の未来に襲い掛かった。

そして次の瞬間、蛹ワームの群れは、次々に河原へ落ちて行った。

「効率悪いよ？」

「五月蠅い！」

そう言っただけは、未来がもう一人の未来に襲い掛かった。

「こうなったら私が貴様を殺してやる！」

と、未来はアラクネワーム フラバスに変態し、消化液が入ったウェブシューターから蜘蛛の糸を出し、もう一人の未来に巻き付けた。

「これでもう、私からは逃げられまい。この消化液に体をジワジワと蝕まれて死ぬ」

フラバスはそう言っただけで、ウェブシューターから消化液を発射したが、先程のゼクターが現れ、消化液を完全ガード。

「えいつ、邪魔をするな！」

そう言っただけで、ゼクターを払うフラバス。

「邪魔なんかしてないよ？」

そう言っただけは、未来だった。

「何？」

「この子と私は一心同体。私の思い通りに動いてくれるのよ」

すると、ゼクターは、未来の腰に装着されたベルトに合体した。

「H e n s h i n ! !」

その瞬間、ベルトからマスクドアーマーが形成され、未来の体をそれが覆い、波動を発生させてフラバスを吹っ飛ばした。

すると、フラバスの体が未来のそれに戻ってしまった。

「あら嫌だ、そのシステムの事をすっかり忘れてたわ」

未来は脅え、冷や汗を垂らした。

「ま、まあ良いわ。こうすれば、あなたも手出しは出来ない筈」

未来はそう言っただけで、加賀美を捕まえ、人質に取った。

「はっ、放せ天道！」

「死にたくなければ黙ってな！」

未来はそう言って、フラバスに変身した。

「かがみんを放して！」

カブトはそう言って、カブトクナイガンを構え、フラバスに銃口を向けた。

「そんな物騒な物捨てて頂戴」

バンツ！ カブトは引金を引いて光弾を放った。

（かがみんが死んじゃう）

そう思ったフラバスは、咄嗟にクロックアップ。光弾を避けた。

「ちよつとあんたっ、かがみに当たったらどうすんのよ！？」

「別にどうもしないわ。それに、端っから当てるつもりだったし」

「正気？」

「問答無用！」

カブトはそう言って、フラバスに再び光弾を放った。

フラバスはクロックアップし、光弾を避けてカブトに接近した。

（来た！）

カブトは、カブトクナイガンを引っ繰り返して構えた。

グサツ！ ワームの腹に、カブトクナイガンの刃が突き刺さった。

「そんなスピードで突っ込んで来るからよ！」

カブトがそう言つと、ワームは爆裂霧散した。

「うわああああ！」

加賀美は爆風で吹き飛ばされた。

「かがみん、あなたもワームでしょ？」

カブトはそう言って、光弾を放った。

ドカツ！ 光弾を喰らった加賀美は、地面に墜落した。

カブトは加賀美に歩み寄り、背中を勢いよく踏み付けた。

うっ！ 加賀美の背中に激痛が走った。

「な、何するんだ天道！？」

「ワーム如きが気安く呼ばないで頂戴」

「俺が・・・ワーム？お前、何言つて・・・？」

と、その時、加賀美は苦痛に蝕まれ、頭を抱えた。

「あつ、頭が・・・割れる！」

加賀美はそう言うと、アラクネワーム ニグリティアに変態。

「不覚にもこの俺が人間の心に支配されるとはな」

ニグリティアは、カブトの足を払い、転ばせた。

「礼を言うぜカブト」

そう言つて、ニグリティアは立ち上がると、カブトの上に跨つた。

「先程の一撃で、俺は自分を取り戻した」

うっ！ ニグリティアが頭を抱えると、加賀美の幻体が現れた。

「天道、俺を殺せ！」

「何故だ、何故人間如きの心が蘇る！？」

ニグリティアは立ち上がり、後退りした。

「くっ、消える！消える消える！」

しかし、加賀美は堪える。

「天道、俺がこいつを抑えている間に殺せ！」

「かがみん・・・」

そう呟くと、カブトは立ち上がった。

「その前に聞かせて。かがみんは、何処で擬態されたの？」

カブトがそう問うと、加賀美の幻体が消滅した。

「かがみん！？」

「無駄だ、奴の心は完全に潰した」

ニグリティアはそう言つて、ウェブシューターから蜘蛛の糸を飛

ばし、カブトに巻き付けた。

（反撃出来ない！）

「驚いたわ、貴方がかがみんに擬態してるなんて」

その声と共に、ニグリティアの後ろにベルトを装着した未来が現

れた。

「嘘・・・でしょ？」

カブトは目を疑った。

「ニグリティア、そいつを放して頂戴」

未来はそう言うと、黒いカブトゼクターを召喚し、ベルトにセッ

トした。

「Henshin!」

その音声と共に、未来はダークカブトに変身した。

「フラバスか……。何のつもりだ？」

ニグリティアがそう聞くと、ダークカブトはゼクトクナイガンで叩き付けた。

ドーンッ！ ニグリティアは爆裂霧散。跡形もなく消え去った。

「キヤーツ！」

カブトは爆風で吹っ飛んだが、直ぐに体勢を立て直した。

「カブト、あなたの相手は私よ」

ダークカブトはそう言っ、光弾を放った、が、カブトも光弾を放って相殺した。

「どう言う事？あなたはさっき私が！」

「そう思う？でもね、あなたが倒したのは、あそこで寝ている蛹達ワームの内の一匹」

「成る程、斧が突き刺さる直前に高速移動で入れ替わったって訳ね？」

「飲み込みが早いわね……。って、そんな事はどうでも良い」

ダークカブトは、ゼクトクナイガンを持ち替え、カブトに襲い掛かった。

しかし、カブトからカウンターを喰らい、ダークカブトは吹っ飛んでしまった。

バシャーッ！ ダークカブトは川の水に浸かった。

「出直して来な」

カブトはそう言っ、ゼクターを外し、去って行った。

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくは PDF 小説ネット広告募集をご覧ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0991c/>

帰ってきたカブト

2008年11月7日06時53分発行